



I2TAは、科学技術振興機構（JST）社会技術研究開発センター（RISTEX）における「科学技術と人間」研究開発領域「科学技術と社会の相互作用」研究開発プログラムの「先進技術の社会影響評価（テクノロジーアセスメント）手法の開発と社会への定着」研究開発プロジェクト（平成19～22年度）です。

研究リーダー

I2TAプロジェクト

リーダー

鈴木達治郎 東京大学公共政策大学院客員教授

TA制度分析グループ

リーダー

城山英明 東京大学大学院法学政治学研究科教授

TA手法構築グループ

リーダー

鈴木達治郎 東京大学公共政策大学院客員教授

ナノテクTA実践グループ

リーダー

竹村誠洋 独立行政法人物質・材料研究機構企画部国際室室長

プロジェクト外部諮問委員

唐木英明 東京大学名誉教授

武部俊一 日本科学技術ジャーナリスト会議副会長／社会技術研究開発センター「科学技術と人間」研究開発領域アドバイザー

海外パネル

Arie Rip Professor, University of Twente

Michael Rogers Director, RREL, Ltd

Christopher Hill Professor, George Mason School of Public Policy

David Cope Director, UK Parliamentary Office of Science and Technology

(2009年4月現在)

I2TAグループ連絡先：吉澤 剛

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 法文1号館23番教室

東京大学公共政策大学院内

Tel: 03-5841-7846 Fax: 03-5841-7880

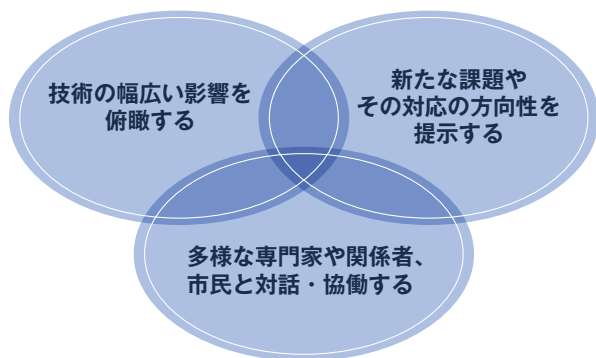
E-mail: info@i2ta.org

<http://www.i2ta.org/>

Original photo・・・Chaosmos Wave Machine X 2系統のウェーブマシンを組み合わせたインタラクティブアート CHAOSMOS / 富岡雅寛 <http://www.chaosmos.jp> (撮影：飯村昭彦)

Design・・・・・・・安孫子正浩 (水蒸気図案堂)

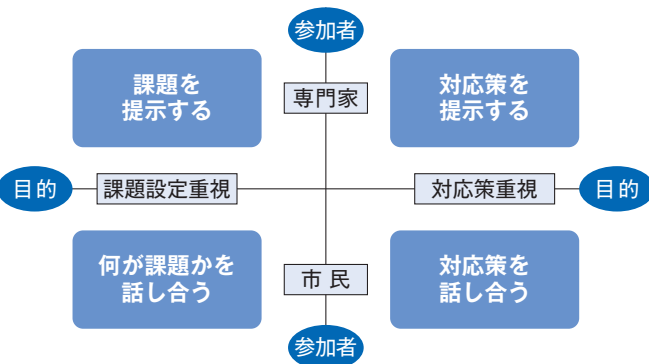
TAの機能



TA | 技術の社会的影響評価

Technology Assessment

TAの活動



テクノロジーアセスメント

——社会の変革と調和のために——

先進技術の発展は、社会への恩恵が期待されている一方で、人の健康や環境に関わる未知のリスクや不確実性も存在しています。このため、その社会適用にあたっては、適切な影響評価が必要です。

TAとは

テクノロジーアセスメント(TA)とは、従来の枠組みでは扱うことが困難な技術に対し、将来のさまざまな社会的影響を独立不偏の立場から予見・評価することにより、新たな課題や対応の方向性を提示して、社会意思決定を支援していく活動を指します。

I2TAの目的

I2TAグループは今後の社会に即した適切なTAのあり方を見出し、TAの意義について関係者や市民からの理解を得て、TAの社会への定着を図っていくことを目的とします。

I2TAの活動

I2TAでは自らをTAの実施機関として想定し、さまざまな情報や知見をもとに社会的な要望や公共的な必要性に応えられるTAを実践します。そのために、以下のような活動をおこなっています。

- 医療・食品・エネルギーの各分野に应用が期待される、ナノテクノロジーを対象とした試験的なTAの実施
- ナノテクノロジーの実用化に関する動向の把握
- 日本における過去の試行的TAの分析と評価、今後のTAの制度的選択肢の検討
- 欧米におけるTAの実施機関の実態や法制度の把握
- TAを支える市民社会との適切なコミュニケーション手法の検討

i2ta

Innovation and Institutionalization of Technology Assessment in Japan

現在進めているTAプロジェクト

エネルギー(ナノグリーン)

ナノテク省エネルギー住宅

省エネルギー住宅の将来技術の進展と社会的需要の把握、および省エネ住宅に対するナノテクノロジーの応用可能性について、調査研究をおこなっています。2009年度は、文献調査や専門家に対するインタビューによるナノテク省エネ住宅のシーズの洗い出しと、社会学者と一般市民を交えたワークショップによる社会的なニーズの探索をおこない、2回目のワークショップでそれらをマッチングさせることを予定しています。

医療(ナノメディシン)

がん治療に向けた ナンドラッグデリバリーシステム(DDS)

ナノ技術を応用したDDS(特にリポソーム、ミセル)製剤の開発・導入における諸課題について、研究者(医・工・薬)、実務家(審査、臨床医)、行政、市民社会など幅広いステークホルダーの協働によるテクノロジーアセスメントを進めています。2009年度はステークホルダーが参加する円卓会議を開催し、ナノDDS技術開発・導入のあり方について、誰もが賛同できる点と、ステークホルダー間で意見が異なる点を整理峻別します。また、これまで進めてきた「ナノテクによるラボ・オン・チップ(LoC)」については、問題構造化手法を適用し、技術開発上の課題などを明らかにします。

食品(フードナノテク)

食品分野へのナノテクの応用

食品分野へのナノテクの応用場面が広がることで、たとえば今までにない風味や食感を持つたり、栄養を吸収しやすくなった食品や、鮮度を感知するパッケージを作ることができると言われています。しかし、こうした応用が思わぬリスクや社会的影響を生みだす可能性もあります。そこで商品開発状況、関連領域の専門家や消費者団体の意見、消費者の意識などを調査し、フードナノテクの類型化や論点整理をしていきます。その後、消費者とフードナノテクの関係者が一堂に会して議論できる参加型のイベントを実施し、「いかなる情報提供が消費者になされるべきか」を軸とした社会におけるフードナノテクのあり方について取りまとめます。

特別テーマ 多層カーボンナノチューブ

総合科学技術会議における議論に役立てられることを期待して、多層カーボンナノチューブのリスク評価・管理をめぐる最近の動向を整理し、提言をおこないました。特に、2008年に出された多層カーボンナノチューブの有害性に関する2本の学術論文、および、厚生労働省によるナノマテリアルについての予防的対応という通知の社会的影響が少なくなかったと見られることから、この問題を中心に扱い、2009年3月に報告書としてまとめました。この課題については2009年度も引き続き調査を続けていきます。